

**【発表募集】 第28回日本糖質学会年会**

共催：日本生物工学会ほか

日時 8月18日(月)～20日(水)  
 会場 つくば国際会議場  
 討論主題 糖質、複合糖質に関する基礎および応用研究  
 発表申込期間 4月1日(火)～5月9日(金)  
 問合せ先 (独)産業技術総合研究所糖鎖医工学研究センター  
 第28回日本糖質学会年会 世話人代表 成松 久  
 TEL. 029-861-3200 FAX. 029-861-3201  
 E-mail: jscr-rcmg@m.aist.go.jp  
<http://www.gak.co.jp/jscr/>

**第8回 山崎貞一賞 候補者募集**

対象 論文の発表、特許の取得、方法・技術の開発などを通じて、  
 実用化につながる優れた創造的業績をあげている人。  
 対象分野 材料/半導体及び半導体装置/計測評価/バイオサイエ  
 ス・バイオテクノロジー  
 応募締切日 4月30日必着  
 問合せ先 (財)材料科学技術振興財団 山崎貞一賞事務局  
 TEL. 03-3415-2200 FAX. 03-3415-5987  
 E-mail: prize@mst.or.jp <http://www.mst.or.jp/prize/>

**東京大学大学院農学生命科学研究科  
 応用生命化学専攻・応用生命工学専攻  
 平成21(2009)年度 修士課程及び博士課程学生募集**

公開ガイダンス日程 第1回:5月17日(土)/第2回:6月4日(水)  
 入学試験日程(予定) 修士課程入学試験:筆記8月20日(水)・21  
 日(木)/口述(面接)8月28日(木). 博士課程入学試験:前期  
 募集(一次)8月22日(金)/二次)平成21年2月20日(金).  
 後期募集(一次)平成21年2月17日(火)/二次)平成21年2  
 月20日(金)  
 問合せ先 東京大学大学院農学生命科学研究科  
 教務課教育支援チーム教務第二担当  
 TEL. 03-5841-5097, 5098  
 E-mail: kyom2@ofc.a.u-tokyo.ac.jp  
<http://www.bt.a.u-tokyo.ac.jp/>

**ニッセイ財団 環境問題研究助成募集**

課題 ①学際的総合研究:人間活動と環境保全との調和に関する  
 研究-都市と環境の調和が持続する社会をめざして-, ②個別研  
 究:同一課題, ③若手研究:37歳未満, 学生(院生含)は含まず.  
 応募締切日 4月14日(月)  
 問合せ先 ニッセイ財団環境問題研究助成事務局  
 TEL. 06-6204-4012 FAX. 06-6204-0120  
 E-mail: kankyou@nihonseimei-zaidan.or.jp  
<http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp>



**科学を志す人びとへ ー不正を起こさないために**

科学倫理検討委員会 編 B5変形判, 160頁, 定価1890円(税込), 化学同人

われわれの研究活動の土台となる科学的知識は、過去の研究結果に基づいて得られた事実の積み重ねで体系づけられている。そこに間違った要素を組み込み、知識体系を崩壊させる危険性をもつ行為が「データの捏造」である。マスメディアで大きく取り上げられた研究成果が実は捏造であったり、有名大学の研究室がデータの捏造や研究費の不正流用を行っているなど、科学研究への信頼をゆるがす事件が多発している今、研究者倫理について再考する必要がある。

本書はまず、第一部で科学の意味や社会が科学に求めているものについて触れ、科学研究の第一の目標が、自らの業績や名声を高めることではなく、科学的知識の体系に新たな貢献をなすことだと述べている。そのあとで、研究競争の激化や研究組織の巨大化など、現在の科学研究をとりまく“不正の起きやすい”環境について考察している。

第二部では、不正防止の対策として、①規定の策定、②倫理教育を挙げ、実際に不正が起きたケースについての検証・考察も行う。①の規定としては、2006年に日本学術会議が策定した「科学者の行動規範」が紹介される。加えて、企業や他国の研究機関ですでに実践され、成果をあげている倫理プログラムを紹介し、これを参考に研究組織や協会も研究倫理プログラムを策定するよう提案している。②の研究倫理教育については、大学院での教育、ならびに学会での倫理研修の重要性が述べられている。また、実際に不正が行われたケースについての検証・考察では、韓国の黄教授によるヒト胚性肝細胞捏造事件や国内の論文捏造事件を題材に、本人のみならず、周囲や学会、雑誌発行者の倫理上の問題に言及している。また、データの“雑音”を除去する行為がデータ改ざんにつながる危険性に触れ、実験結果に対する再現性重視の姿勢を研究室内で徹底するよう提案している。

第三部はQ&A形式で、不正の起こりそうなケースと、不正を防止する行動を紹介している。

異なる章で同じような趣旨が述べられていることがあり、章立てに工夫の余地が見られる。しかし、不正を防止するための心構えや、具体的な対策についての情報が豊富に盛り込まれているので、本書を研究室に1冊置いておき、たまに手にとって注意を喚起し合っただけがどうか。  
 (大阪大谷大学薬学部 錦織理華)